17.9.23

時代の正体
障害者殺傷事件考

「地域生活を」広がる支援
やまゆり園入所者

大量殺傷事件があった相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」の入所者について、家庭の雰囲気に近いグループホーム（GH）で暮らす地域生活への移行を支援しようという動きがじわりと広がっている。横浜、相模原市に続き、川崎市内の事業者が新たに名乗りを上げた。「重度障害者も地域で暮らせると示していくことこそ、障害者の尊厳をないがしろにした事件を乗り越えていくことになる」。その思いは共通している。

（成田　洋樹）

苦しい現状を打ち明けながらも、やまゆり園入所者の地域移行を前に進めたい思いを口にする。早ければ年内の新規募集時に希望者を募り、見学や宿泊体験の機会も提供していきたいという。

同施設を含む市内6カ所の入所施設は8月下旬、川崎市障害計画課に対し、受け入れに協力していく意向を伝えた。同市が、障害福祉サービスの支給決定をしているやまゆり園入所者は6人で、同課は「担当職員が参加する入所者の意向確認の場で、選択肢の一つとして示したい」と話している。

■受け入れへ準備

相模原のGHでの受け入れを巡っては、社会福祉法人「県央福祉会」が既に具体的な取り組みを始めている。

2019年度以降に新設するGHで30人程度の受け入れを計画。来春新たに設けるGHに、やまゆり園入所者の体験入居用に2部屋設ける方向で準備しており、今月8日に開いたGH説明会には入所者家族も参加した。

県央福祉会の担当者は参加者の前で「県のやまゆり園再建構想案が出たばかりで見切り発車の側面があるが、入所者を受け入れていきたい」と強調した。入所者家族は「熱意を持って取り組んでいる姿が伝わってきた」と話し、GH体験への関心を高めている様子だった。

また、横浜市では、市内の約110施設で組織する横浜知的障害関連施設協議会、約150のGHでつくる市グループホーム連絡会などで準備が進む。同協議会の関係者は「事件当時、山あいの地に150人を超える知的障害者が暮らしていることを知らなかった人は多いと思う。住み慣れた場所を離れて暮らさざるを得なかった当事者が、街中で暮らせるよう支えることこそ福祉事業者や地域社会の役割だ」と訴える。

現在、やまゆり園入所者130人のうち110人は横浜市港南区の仮移転先で、20人は他の県内施設で4月から約4年間の仮住まい生活を送っている。県の再建構想案では、2021年度に相模原市緑区の現在地と仮移転先周辺に新施設を整備するとしている。現在地で再び入所させたいという家族が少なくないが、仮移転先周辺を希望する人もいるという。地域移行に関心を寄せる人もいる。

今後は入所者が望む暮らしの場についての意向確認が本格化するが、施設以外の生活を選択肢として考えてもらうためにはGHやアパートでの地域生活体験の受け入れ先の確保が課題となっている。

相模原市内にグループホームを新設する県央福祉会が希望者向けに開いた説明会。やまゆり園入所者家族も参加した　＝8日、相模原市中央区

■川崎でも名乗り

川崎市の指定管理施設で、社会福祉法人「育桜福祉会」が運営する同市中原区の入所施設「桜の風」（定員50人）は、川崎にゆかりがある入所者の受け入れに向けて検討を始めた。同施設では、重度の知的障害者の地域生活移行に力を入れており、一定期間入所後にGHなどへの移行を目指しているのが特徴だ。川崎での暮らしを望むやまゆり園入所者と家族の選択肢を広げたい考えだ。

桜の風には現在、自傷他害行為に及ぶことがあり、対応が難しいとされる「強度行動障害者」が定員の半数を超える26人いる。それでも2013年の開設以降、最重度の「支援区分6」で、強度行動障害の4人を含む18人がGH生活に移行した。

「在宅介助で苦労している家族を中心に入所希望者が多い中、やまゆり園入所者を必ず受け入れることができるかは分からない。でも可能な限り協力したい」。中山満施設長は、

惨劇乗り越える一歩

桜の風は、入所したら最期まで過ごす「ついのすみか」ではなく、地域生活に移るまでの一定期間を過ごす「通過型」という理念で施設を運営している。入所施設では社会の多くの人々が享受しているような自由な暮らしを送ることは難しいと考えているからだ。背景には、入所施設の構造的な問題がある。職員と入所者の間で上下関係が生まれやすく、「支援」という名の「管理」に常に陥りやすい側面があると中山施設長は受け止めている。管理がエスカレートすれば、差別や虐待につながりかねないと自覚しながら当事者と向き合っているという。

「植松聖被告がコンビニ店で働いていたら、犯行に及んだだろうか。入所施設で働いたからこそ、障害者の存在を否定するあの事件が起きたのではないか」

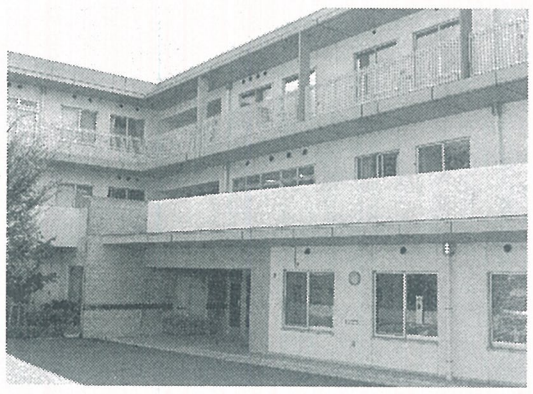
中山施設長は事件を機に入所施設のありようを問い直す動きが広がらなければ、当事者主体の生活を実現するのはおぼつかないと考えている。

実際、重度の知的障害者が施設ではなくGHなどで暮らすのは難しいという意見は、福祉事業者の間で少なくない。桜の風では、当事者が本来持っている力を引き出しつつ、地域での支援体制が整ったら暮らしの場をGHなどに積極的に移す取り組みを進めている。仮にGH生活になじめなかった場合、施設に戻って再挑戦に向けて仕切り直す仕組みもある。

川崎市にゆかりがあるやまゆり園入所者6人や家族にとってみれば、同園とは別の運営者による支援を受けながら地域移行を目指すという新たな選択肢を手にすることになる。中山施設長は「どんなに重度の障害者でも施設ではなく地域で暮らせると示すことが、あの事件を乗り越えていくことになる」と訴える。

課題もある。ことし2月、地域移行が進んで空いた入所定員枠6人に対し、希望者は約130人に上った。高齢の親による在宅での介助が限界に達している家庭が少なくなかったという。今後も同様の状況が続くことが見込まれる中、在宅の障害者家族からみれば「プラチナチケット」とも言われる入所生活を既に手にしているやまゆり園入所者を優先して何人も受け入れることは難しい。

地域移行の成否は、他の施設やGH運営者に受け入れの動きがさらに広がるかどうか、事業者の使命感からの取り組みを行政がどこまでバックアップするかが鍵を握っている。



津久井やまゆり園の入所者について、地域生活移行を見据えて受け入れを検討している入所施設「桜の風」　＝川崎市中原区

まさに政治的、外交的な配慮ではないか。

書籍化のお知らせ

「時代の正体」シリーズの書籍化第3弾「ヘイトデモをとめた街―川崎・桜本の人びと」が刊行されました。ヘイトデモに対する闘いからヘイトスピーチ解消法成立への歩みをたどりながら、「共生のまち」に暮らす住民の思いをつづり、差別の実相を問う。現代思潮新社から1600円（税別）で全国の書店で販売中。

広告

第一期180戸 満員御礼！いよいよ全戸募集開始!!
この時期だから選べる豊富な間取りプラン！

郊外の核都市と
進化を続ける街、
国営昭和記念公園
「サンシティ」シリ
『サンシティ立川
2018年6月に

お元気なときに入居ていただき、加齢にい変化していくニーに応じて生活支援や療、介護サービスを供していく住宅型有老人ホーム。それを現するのが、㈱ハーセンチュリー・モア運営するケア付き高者マンション有料老ホーム「サンシティ」す。サンシティ立川和記念公園は、サンティシリーズ関東最級の規模を誇る広大敷地で、圧倒的な緑自然を感じていただます。そして、サンティならではの充実た数々の共用施設。プルがあり、レストラ、フィットネス、カラケ、シアターがある。た、クリニック・薬局